攻撃行動の形成と親の養育行動の関連の検討 -社会的情報処理を媒介として-

筑波大学大学院人間総合科学研究科 桑 原 千 明

An investigation on the association between parenting behavior and the development of aggressive behavior.

-dose the social information processing mechanism mediate the association?-

Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba. KUWABARA, Chiaki

要約

本研究の目的は、身体的攻撃の先行研究で示されている養育行動が社会的情報処理を媒介として攻撃行動に影響を与えるという媒介モデルの関係性攻撃における適用可能性を検討することであった。この目的のため、〈研究 1〉では幼児/児童における社会的情報処理測定のためのツールを作成し、〈研究 2〉では幼児/児童における養育行動、社会的情報処理、攻撃行動の関連を検討した。その結果、幼児では、不適切な行動を無視するという養育行動が、社会的情報処理のうち関係性攻撃により自分の望む目標は達成できないと考える傾向と正の相関を示し、関係性攻撃により自分の望む目標が達成できると考える傾向にある幼児は、関係性攻撃をしがちであると見られていた。さらに児童では、養育行動と社会的情報処理の有意な関連は認められず、社会的情報処理のうち敵意帰属が関係性攻撃と関連していた。本研究の結果から、関係性攻撃においても媒介モデルの適用可能性は示唆された。

【キー・ワード】関係性攻撃、社会的情報処理、養育行動、媒介モデル

問題と目的

攻撃行動研究は、攻撃行動を行動形態の観点から関係性攻撃(relational aggression)と顕在的攻撃 (overt aggression)の2つに分類する立場が存在する(Crick & Grotpeter, 1995)。関係性攻撃は「友人関係や他の関係にダメージを与えたり、支配したりすることにより害を与える攻撃行動」と定義され (Crick & Grotpeter, 1995)、"仲間はずれ"、"無視"、"陰口"という3要素を含んでいる。この攻撃形態は幼児期から存在することが報告されており、児童期以降も持続するとされている(Crick, Casas, & Mosher, 1997;磯部・佐藤, 2003)。攻撃行動は、その対象となる子どもとともに、攻撃行動を行う子どもにおいても現在および将来の適応問題と関連することが先行研究の知見から示されている (e.g., Crick, 1996; Crick, Ostrov, & Werner, 2006; 畠山・山崎, 2006; 磯部, 2002)。

このように適応上の問題をもたらす攻撃行動の過度な形成を予防するための示唆を得るためには、 攻撃行動の形成過程を明らかにすることが有効であると考えられる。攻撃行動の形成を扱った研究の 中には、親の養育行動に注目し、子どもの攻撃行動に与える影響を検討するものが多く見受けられる。 三鈷(2008)では、訓練可能な親の養育スキルと攻撃行動との関連を検討し、感情的な叱責やスパンキ ングが多いほど子どもの問題傾向の程度が高いこと、母親において身体的攻撃が多いほど子どもの攻 撃的行動が多いことが示された。親の養育行動と子どもの攻撃行動との関連は社会的学習理論で説明 される(Bandura, 1973)。さらに近年、関係性攻撃との関連が注目される養育行動として"心理的コ ントロール"がある(Barber, 1996)。心理的コントロールとは"親子関係の結びつきの利己的な利用 や,操作,否定的に愛情をとりこんだ表現や非難,そして極端な個人的コントロールを通して,心理 的な発達を抑制し、侵入するタイプのコントロール"と定義される養育行動であり(Barber, 1996)、 先行研究においては、関係性攻撃との関連が存在するという知見(e.g.、磯部 2006; Nelson, Hart, Yang, Olsen, & Jin, 2006)と関連が存在しないという知見(e.g. Hart, Nelson, Robinson, Olsen, & McNeilly-Choque,1998)が混在している。さらに、親の養育行動が社会的情報処理(以下、SIP)という 認知プロセスに影響を与え,攻撃行動の形成に影響を与えるという媒介モデルも報告されている。例 えば Dodge, Pettit, Bates, & Valente (1995)は、養育行動として虐待ともいえる厳しい身体的攻撃を ともなうしつけに焦点をあて、5年間の縦断研究から養育行動が子どもの SIP を媒介として子どもの 攻撃的行動に影響を与えることを示した。ここで、養育行動と攻撃行動を媒介するとされる SIP モデ ルとは、攻撃的行動の規定因のひとつとして考案されたモデルである(Crick & Dodge, 1996; 濱口, 2002)。SIP モデルとは、STEP1 手がかりの符号化、STEP2 手がかりの解釈(意図の解釈)、STEP3 目標の明確化, STEP4 反応検索, STEP5 反応決定(反応評価・結果予期など), STEP6 反応実行の 6 ステップからなる状況特殊性のあるオンラインの情報処理であり(Dodge, Pettit, McClaskey, Brown, & Melissa, 1986),その測定は仮想状況を用いた場面想定法による面接法(畠山, 2003)や質問紙法(坂 井・山崎, 2004)で行われる。攻撃行動のように有能でない社会的行動は情報処理における偏りにより 生じるとされている(e.g., Dodge et al., 1986; 濱口, 2002)。SIP と関係性攻撃の関連を検討した先行 研究知見から,関係性攻撃児は,"敵意帰属バイアスが高い(STEP2)" 関係性攻撃を高く評価する (STEP5 反応評価)" "関係性攻撃により相手が嫌な気持ちになるとは考えない(STEP5 結果予期:感 情予期", "関係性攻撃により自分の思う通りになる(STEP5 結果予期:目標達成)"のような SIP の 偏りがあることが報告されている(Crick, Grotpeter, & Bigbee, 2002; Crick & Werner, 1998; 坂井・ 山崎, 2004)。

上述のように先行研究では、攻撃行動の形成を説明するモデルとして SIP の媒介モデルが示されている(Dodge et al., 1995)が、このモデルは、顕在的攻撃で確認されているのみであり、関係性攻撃での検討は未だなされていない。さらに、養育行動として対象とされていたのは虐待的な養育行動のみであることから、現在までの知見から媒介モデルを一般化することは難しいと考えられる。また本邦においてはこのモデルを検討した研究はなく、それどころか関係性攻撃と SIP の関連を検討した研究もほとんどない。したがって、本研究においては、子どもの攻撃行動の形成に関する示唆をえるために、関係性攻撃を対象として、養育行動、子どもの SIP、攻撃行動の関連の検討を行うこととした。

研究 1 では SIP の測定に必要となる測定ツールを作成するための調査を実施し、研究 2 では養育行動、子どもの SIP、関係性攻撃の関連を検討した。

なお方法および結果のうち中間報告(発達研究 2009 年 23 号)と重複する部分は,必要事項のみ重ねて記述し,簡潔にできる部分は簡略化した。

研究1

方 法

1. **調査対象者** 幼児: 私立,公立幼稚園,保育所 13 施設に所属する保育者 34 名(女性 33 名)

児童:公立小学校に所属する教師85名(女性62名,不明1名)

2. 調査時期 2008年6月から9月

3. 手続き 調査は、個別記入式の質問紙調査により実施した。

4. 質問紙の構成 ①調査対象者について尋ねる部分:年齢,性別,職務年数,担当学年

②幼児/児童が日常生活で経験する葛藤状況について尋ねる部分: 4 つの葛藤状況エピソードが100字程度の文章で提示され,各エピソードごとに(1)各葛藤状況を日常生活において保育者が目にする頻度を尋ねる項目と、(2)各葛藤状況において実際に幼児がとる応答的行動を尋ねる項目とで構成されていた。提示された 4 つの葛藤状況エピソードは、Crick(1995)を参考に著者と心理学系大学院の教員 1 名の協議の上で選定されたもので、幼児/児童において想定される関係性葛藤状況と身体的・物理的葛藤状況、各 2 エピソードからなっていた。 (1)葛藤状況の日常生活における頻度を尋ねる項目では、"ほぼ毎日見かける"、"しばしば見かける"、"時々見かける"、"ほとんど見かけない"、"これまでに一度も見たことがない"の 5 件法による評定を求め、(2)各葛藤状況において実際に幼児がとる行動を尋ねる項目では、各状況で幼児がとる行動を、望ましい行動と望ましくない行動とに二分して自由記述形式で回答を求めた。

結果と考察

1. 各葛藤状況エピソードの頻度についての検討

各エピソードに示された葛藤状況を保育者が目にする頻度を検討するため、5段階評定の各段階への回答の全回答に対する割合を算出した(以下、回答率とする)。

まず幼児では,算出した回答率から1つの関係性葛藤状況が幼児の日常生活において妥当ではない可能性が示唆されたため,変更を加え,4つの葛藤状況を幼児のSIP測定のためのエピソードとして決定した(表1-1;詳細は中間報告参照のこと)。

児童では、関係性葛藤状況 1, 2(RC1, RC2)、身体的・物理的葛藤状況 1, 2(OC1, OC2)の全 4 エピソードについて"ほぼ毎日見かける"、"しばしば見かける"、"時々見かける"への回答率が 86%、96%、86%、80%と高い値をとった。このことから全エピソードとも教師がある程度目にする妥当な

葛藤状況であると考えられ、これらの 4 葛藤状況を児童の SIP 測定のための仮想エピソードとして 決定した(表 1-1)。

表 1-1 研究 1 を通して選定された仮想葛藤状況エピソード

幼児	児童
クラスのみんなでお外で遊ぶ時間、同じクラスのお友だち何人かが鬼ごっこをしていました。その日、(葛藤児)ちゃんは鬼RC1 ごっこをとてもやりたかったので、鬼ごっこをしていた1人のお友だちに『いれて』と言いました。 ちるとその友だちは『(葛藤 携)ちゃんはあとで』と言いました。	昼休みに、同じクラスのお友だち何人かが校庭でドッジボールをしていました。その日、(葛藤児)ちゃんはドッジボールをとてもやりたかったので、ドッジボールをしていた1人のお友だち関に『いれて』と言いました。するとその友だちは『(葛藤児)ちゃ係、んはあとで』と言いました。
(葛藤児)ちゃんが廊下を歩いていると、同じクラスの2人のお、\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	性 (葛藤児)ちゃんが廊下を歩いていると, 同じクラスの2人のお 友だちがいました。(葛藤児)ちゃんが『やあ!』と言うと, 2人 はお返事をせずにひそひそと小さな声でおしゃべりをしながら 教室に行ってしまいました。
(葛藤児)ちゃんは机の上で積み木で高い建物を作っていま OC1 した。すると,その近くを通ったお友だちが机にぶつかりまし。 ち。積み木の建物は倒れて,壊れてしまいました。 藤葉	身(葛藤児)ちゃんは机の上で積み木で高い建物を作っていま体した。 すると,その近くを通ったお友だちが机にぶつかりまし的、た。 積み木の建物は倒れて,壊れてしまいました。
(葛藤児)ちゃんはお気に入りの靴をはいて幼稚園へ行きましばない。 た。お外遊びの時間に突然お友だちが後ろからぶつかってき、況て、(葛藤児)ちゃんは水溜りに入ってしまい、靴が泥だらけになってしまいました。 "(葛藤児)ちゃん"の部分には幼児の面接では対象児の名前をあ	はいかったさと、(葛藤児)らゃんは水溜りこ人ってしまい。 的・靴が泥だらけになってしまいました。

2. 各葛藤状況エピソードにおける幼児/児童の反応行動の検討

続いて、各葛藤状況において幼児/児童がとる反応行動の実態の把握、および各行動がどのような行動としてとらえられるかを検討するため、研究1の回答に含まれる反応行動についての記述内容を整理し、構造化するための分析手法として、KJ法(川喜多,1967)の手続きを援用した。幼児の結果については2名、児童の結果については8名の心理学を専攻する大学院生で分類を行った。分類された幼児/児童の結果を、著者を含めた心理学を専攻する大学院生2名と教員1名で一定の基準に基づき選定を行った(中間報告参照のこと)。さらにこの選定作業では、幼児一児童間での比較検討を可能とするために、提示される反応行動を発達段階間で一貫させることとした。その結果、関係性攻撃としては[関係性攻撃行動]、有能行動としては[理由を聞く]、[思いを伝える]、顕在的攻撃としては[手をだす・身体的攻撃]のカテゴリが抽出され、そのカテゴリに基づき反応行動を決定した(表1・2)。今後の調査においてSIPの各変数を測定する際には、本調査を通して幼児/児童への提示の妥当性がある程度確認された4つの葛藤状況エピソード、および各葛藤状況エピソードでの反応行動を用いることとした。

表 1-2 研究 1 の結果から選定された反応行動

	葛藤状況エピソード											
	RC1	RC2	001	002								
	有能主張行動 (思い	を伝える/理由を聞く)										
反	どうして後でなの。	どうして何も言ってくれないの。	なんで壊すの。一生懸命作ってたん だよ。	ぶつかったから靴が汚れちゃっ たよ。								
	関係性攻撃行動											
行動	もう遊んであげない。	もう友だちじゃないからね。	もう遊んであげない。	もう遊んであげない。								
	顕在的攻擊行動											
	押したり、たたいたり、けっ	ったりする。										

研究2

方 法

以下の記述においては、研究 2- Ⅰを幼児対象、研究 2- Ⅱを児童対象の研究とした。

<u>**I-1.幼児対象調査の調査対象者**</u> 調査参加への同意を得た9の私立幼稚園,保育所に在籍する5-6歳の幼児140名を対象とした。なお、各調査への参加者は表2-1の通りであった。

表 2-1 各調査の対象者およびその参加人数と属性

調査	対象者	N	性別	年齢
SIP	幼児	134	女児:65名/男児:69名	5:4-6:8(M=6:1)
養育行動	保護者	121	女性:120名/男性:1名	20代-40代
子どもの行動	保育者	12(111名分)		

※ただし面接へ参加した幼児数には面接の一部のみに参加した幼児も含んでいる。

I-2. 幼児対象調査の手続き

養育行動:保護者に対する質問紙調査を実施した。質問紙は、三鈷(2008)の養育スキル尺度 45 項目および Hart et al. (1998)の心理的コントロール尺度からなっていた。養育スキル尺度は9下位尺度からなり(表 2-2)、4 件法での評定を求めた。心理的コントロール尺度は、Hart et al. (1998)の8項目をバックトランスレーションの手続きを経て邦訳し用いた。この8項目は5件法での評定を求めた。いずれの項目も、得点が高いほど保護者がその養育行動をとることを示していた。

下位尺度	項目数	下位尺度の示す養育行動	
F1: 誘導的しつけ	6	子どもの不適切な行動がいかに相手を傷つけているかを相手の視点に立って考えさせる行動	_
F2:感情的叱責	8	子どもに対する罰として感情的に叱責する行動	
F3:注目・関与	6	子どもの様子や行動に注目したり、遊びや活動を一緒に行ったりする行動	
F4: スパンキング	4	子どもの不適切な行動に対して手足をたたいて注意する行動	
F5:物的報酬	4	子どものよい行動に対して物的報酬を与えて誉める行動	
F6:援助的 コミュニケーション	4	賞賛や励ましといった子どもに対するポジティブな働きかけや、援助的な関わり行動	
F7:きげんとり	7	子どもの不適切な行動に対して、子どもの機嫌をとろうと示す一貫性のない行動	
F8: 不適切行動の無視	4	子どもが自分の要求を無理に通そうとしたり、注意をひこうとしたりして不適切な行動をしたと きに、取り合わないで我慢する行動	

子どもに対する怒り感情を伴った身体的攻撃

F9:身体的攻擊

表 2-2 養育スキルの各下位尺度が示す養育行動と項目数(三鈷, 2008)

SIP: 幼児に対する面接調査を実施した。先行研究(畠山, 2003)を参考に計画された面接調査では他者の意図が曖昧な葛藤状況エピソードについて,3 枚の絵カードを提示しながら読み聞かせをし,その状況における SIP 変数のうち,STEP2 として①敵意帰属,STEP5 として②反応の否定的評価/③結果予期 I (ネガティブ感情予期; ある反応行動をすることで,相手がネガティブな感情になると思う程度)/④結果予期 I (不補償予期; ある反応行動をしても,目標が達成できないと思う程度)についての回答を求めた。①はエピソード提示後すぐに回答を求め,②,③,④は,各状況における反応行動を I つずつ絵カードを用いて示し,各々の反応行動について回答を求めた。④の不補償予期は,あらかじめ対象児が望むと考える他者の行動を先行研究を参考に著者が決定して,提示した。面接の流れ,質問の概要および回答の得点化については表 I に示した。

表 2-3 SIP 変数の具体的質問・回答方法および得点化の方法(幼児)

変数	具体的な質問	回答法	得点化
STEP2 敵意帰属			
葛藤生成者の意図解釈	『この同じクラスのお友だち(絵カードを指して)はどうして、(葛藤児)ちゃんに『あとで』と言ったと思う?』 →・	自由回答 'いじわるしようとした""していない"の 2 段階評定	敵対的な意図帰属;1 非敵対的な意図帰属;0
STEP5 反応決定(評価/約	吉果予期)[あらかじめ各場面についての有能主張行動,	関係性攻撃行動, 顕在的攻撃行動を提示]	
反応行動 否定的評価	『(葛藤児)ちゃんにとってこの方法はどんな方法だと思う?』	3 段階評定 "とてもよい","普通","だめ"	【 "よい";0 点 "普通";1 点 "だめ";2 点
結果予期 【ネガティブ感情予期】	『もし(葛藤児)ちゃんがこんなことをしたら、お友だちはど んな気持ちになると思うかな?』	自由回答 →"○""×""△"を用いた3段階評定	ポジティブ感情:0 点 ニュートラル感情:1 点 ネガティブ感情;2 点
結果予期 【不補償予期】	『もし(葛藤児)ちゃんがこんなことをしたら, お友だちは仲 間に入れてくれると思うかな?』	2 段階評定 "補償してくれる","補償してくれない"	 補償あり;0 点 補償なし;1 点

幼児の行動:保育者を対象に、Preschool Social Behavior Scale-Teacher Form(PSBS-T; Crick et al., 1997)のうちの[関係性攻撃(5 項目)], [身体的攻撃(PA; 6 項目)]の磯部(2003)による邦訳を使用した。また PSBS-T のうちの[向社会的行動 (4 項目)]についても邦訳して用い、全ての項目について 5 件法で評価することを求めた。

Ⅱ-1. 児童対象調査の調査対象者 2 校の公立小学校に在籍する 4-6 年生の児童 180 名, および担

任教諭6名を対象とした。なお各調査への参加者は表2-4に示した通りであった。

表 2-4 各調査の対象者およびその参加人数と属性

測度	対象者	N	性別	年齢
SIP	児童	171	女児: 81名/男児: 90名	4年生: 59名/ 5年生: 57名/ 6年生: 55名
養育行動	児童	86	女児: 41名/男児: 45名	4年生: 26名/ 5年生: 28名/ 6年生: 32名
子どもの行動	教師	6(135名分)		

※なお、協力校との協議のもと、養育行動に関する質問紙を実施しない学校、および攻撃行動をクラスの一部についてのみ実施した学校を含んでいた。

Ⅱ-2.児童対象調査の手続き

養育行動:児童に質問紙調査を実施した。質問紙には、①FDT 親子関係診断検査(東・柏木・繁多・唐澤,2002)から[被拒絶感],[厳しいしつけ],[被受容感],②TK 式診断的新親子関係検査(品川・品川・森上・河井,1972)から[非難],さらに、③心理的コントロール項目として、幼児で使用した[心理的コントロール]項目を児童用に一部改訂した6項目を使用した(表 2-5)。①、③は5件法、②は4件法で評定することを求めた。分析に際して②の得点を逆転したため、①、②、③とも、項目の得点が高いことがそれぞれの養育行動を親が頻繁に用いていることを示していた。

表 2-5 養育行動の各下位尺度が示す養育行動(東ら, 2002; 品川ら, 1972)

下位尺度	項目数	下位尺度の示す養育行動
厳しいしつけ	5	子どもが親のしつけを厳しいものだと認知している程度
被拒絶感	10	子どもが自分は両親から拒絶されていると思っている程度
被受容感	10	親が自分を信頼し、受容してくれると子どもが思っている程度
非難	8	子どもをおどかしたり、悪く言ったり体罰やそのほかの罰を与えたり、どなりつけたり、でていけといったりなど親の子どもに対する荒っぽい非難の態度。子どもに見られる傾向としては、主として親の態度を反映して、やはり荒っぽく、反抗的で乱暴。協調性に欠け、弱いものをいじめ、時々は非行に走る子どももいる一方恐れと不安からオロオロと神経症的傾向に陥る子どもも見かけます

SIP: SIP を測定するために、自己記述式の質問紙調査を実施した。質問紙の流れは面接の流れと同様であり、質問項目は坂井・山崎(2004)を参考に、幼児の面接との連続性を持たせることを考慮して作成した。具体的な質問項目およびその得点化は表 2-6 の通りであった。

		- F	*
変数	具体的な質問項目	回答法	得点/得点化
STEP2 敵意帰属			
葛藤生成者の意図解釈	『どうしてあなたに『あとで』といったと思いますか』 『このお話の中で〈葛藤生成者〉についてどう思いますか』	四者択一 二者択一	
STEP5 反応決定(評価/結	果予期)[あらかじめ各場面についての有能主張行動、関	係性攻撃行動、	頁在的攻撃行動を提示]
反応行動 否定的評価	『(RA/PA/L/RI)をすることを貴方はどう思いますか』	3 段階評定	【 "よい";1 点 "普通";2 点 "だめ";3 点
結果予期 【ネガティブ感情予期】	『もし(RA/PA/L/RI)をしたら、(葛藤生成者)は嫌な気分にな ると思いますか』	5 段階評定	①とてもそう思う; 1 点~⑤全然そう思わない; 5 点
結果予期 【不補償予期】	『もし(RA/PA/L/RI)をしたら、ドッジボールに入れてくれると思 いますか』	5 段階評定	

表 2-6 SIP 変数の具体的質問・回答方法および得点化の方法(児童)

児童の行動:担任教師に対して、Children Social Behavior Scale-Teacher Form(CSBS-T; Crick, 1996)の[関係性攻撃(5 項目)], [身体的攻撃(4 項目)], [リーダーシップ(3 項目)], [仲間集団への誘い(3 項目)], の Kawabata, Click, & Hamaguchi(*in press*)による邦訳を使用した。5 件法で評価することを求めた。

結果と考察

本研究において、子どもの行動として、幼児では[関係性攻撃]、[身体的攻撃]、[向社会的行動]を、 児童では[関係性攻撃]、[身体的攻撃]、[リーダーシップ]、[仲間集団への誘い]を扱ったが、本報告に おいては[関係性攻撃]の結果に注目して解釈、記述をした。

Ⅰ-1. 幼児対象調査の使用尺度の検討(表 2-7)

使用尺度の内的一貫性を検討するため、下位尺度ごとにクロンバックのα係数を算出した(表 2-7)。 保護者評定の養育スキル尺度 養育スキル尺度について、ほぼ全ての下位尺度で三鈷 (2008)と同程度の値となり、十分な内的一貫性が確認されたことから、本研究においても 9 下位尺度を用いることとした。心理的コントロールも同様に十分な内的一貫性が示されたことから、この 8 項目を心理的コントロール因子とした。

保育者評定の PSBS-T 保育者間で解釈が大きく異なった向社会的行動 1 項目を除外し、 α 係数を 算出した結果、いずれの下位尺度でも十分な内的一貫性が確認されたことから、磯部・佐藤(2003)と 同様の 3 下位尺度を用いることとした。

I-2. 幼児対象調査の養育行動, SIP, 攻撃行動の関連の検討

まず,各変数の記述統計量を算出した(表 2-7)。次に,養育行動,SIP,幼児の行動の関連を検討するため,相関係数を算出した(表 2-8,2-9)。なお,本報告では欠損データを除外し,養育行動一幼児の行動 98名,養育行動-SIP58名,SIP-幼児の行動 59名について行った分析結果を報告する。

養育行動-攻撃行動の関連(表 2-8) 関係性攻撃と養育行動の各下位尺度との間に有意な関連は見

られなかった。本研究では関係性攻撃と心理的コントロールとの関連は認められず、同じく幼児を対象として国内で検討された磯部(2006)とは異なる結果となった。今後は、本研究の知見も含め、心理的コントロールの日本の養育行動における位置づけを探るとともに、親の性別・子どもの性別など性差なども含めたさらなる検討が必要である。

養育行動—SIP の関連(表 2-9) [不適切行動の無視]が[RCRA 不補償予期], [OCRA 不補償予期]と正の相関が認められた(r=.269; r=.332, ps<.05)。つまり保護者が不適切行動の無視を養育行動として多く用いるほど,子どもは関係性葛藤状況でも,身体的・物理的葛藤状況でも,関係性攻撃により自分の望む補償をしてもらうことはできないと考える傾向にあることが明らかとなった。このことから親の養育行動としての無視と子どもの関係性行動としての無視は,異なる行動であり,[不適切

養育行動 F1: 誘導的しつけ 121 3.7 (0.41) 87 F2:感情的叱責 121 2.4 (0.51) .83 0.46) F3:注目·関与 121 3.1 (.79 F4: スパンキング 2.3 (0.71121 .84 F5:物的報酬 2.6 (0.60) 121 84 0.42) F6:援助的コミュニケーション 121 3.4 (83 0.49) F7:きげんとり 2.0 (121 .56 0.64) F8: 不適切行動の無視 121 2.7 (.77 0.66) F9:身体的攻擊 121 1.7 (.77 0.63) 心理的コントロール(PC) 121 1.7 (84 社会的情報処理 敵意帰属(RC敵意帰属) 119 $0.5 \quad (0.66)$ 葛 藤 関係性攻撃行動の不適切度の評価(RCRA不適切度評価) 120 3.6 (0.85) 状係 関係性攻撃行動に対するネガティブ感情予期(RCRAネガ感情予期) 況性 81 1.3 (0.82) 関係性攻撃行動に対する道具的目標達成予期(RCRA不補償予期) 100 0.3 (0.60 敵意帰属(OC敵意帰属) 120 0.5 (0.69

表 2-7 各変数の記述統計量

N

118

71

104

110

110

110

3.5 (

 $0.3 \quad (0.58)$

1.4 (0.58)

3.5 (0.71)

1.4 (0.51)

0.9 (0.84)

0.96)

.88

.87

.72

平均値

(SD

) a係数

※SIPの各の各変数の値は、エピソードごとに設けられた1項目の質問に対する回答を得点化し、その得点を合計した値を用いて算出した。

関係性攻撃行動の不適切度の評価(OCRA不適切度評価)

関係性攻撃行動に対するネガティブ感情予期(OCRAネガ感情予期)

関係性攻撃行動に対する道具的目標達成予期(OCRA不補償予期)

葛物 藤田体

理

子どもの行動(教師評定)

関係性攻撃(RA)

身体的攻撃(PA)

向社会的行動(PB)

F1F2F3 F4 F5F6 F7F8 F9 PC関係性攻撃 .077 .041 .123.121 .150 .125.147 -.066 .053 .049 .201 * 身体的攻撃 -.047 -.010 -.039 .078 .048 .074-.026 121 .063 -.047 -.195 **†** -.197 **†** 向社会的行動 021 - 038 023 - 123 008

表 2-8 養育行動と幼児の行動との相関係数

^{*;}p < .05 , †;p < .10

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	PC	RA	PA	P
RC敵意帰属	070	.026	.031	.049	.078	091	018	.174	.017	.126	011	025	.103
RCRA不適切度評価	014	186	.177	159	022	.088	.015	.162	.037	.035	066	141	.126
RCRAネガ感情予期	.156	.050	.004	015	.000	.099	.147	137	108	130	054	.081	123
RCRA不補償予期	.180	061	.165	053	066	.112	085	.269	065	.083	287 *	131	067
OC敵意帰属	.069	153	.080	014	228 †	.102	143	174	059	077	124	042	050
OCRA不適切度評価	019	009	.005	170	034	021	.110	070	030	106	082	278	.225 †
OCRAネガ感情予期	079	.169	.054	025	.103	.006	.138	.012	.185	.177	083	.250	176
OCRA不補償予期	.105	.207	006	.055	.000	056	.164	.332	.191	.121	137	.009	124

表 2-9 SIP の各変数と養育行動, 幼児の行動との間の相関係数

行動の無視]は SIP の偏りを形成しない有効な養育行動である可能性が示された。また,[物的報酬] と[OC 敵意帰属]との間の相関が有意傾向であり $(r=\cdot.197,p<.10)$,これは誉める際に親が物的報酬を用いがちな場合,子どもは身体的・物理的葛藤状況における他者の意図を"故意である"とみなす傾向にあることが示された。

SIP—攻撃行動の関連(表 2-9) 関係性攻撃については、[RCRA 不補償予期]との負の相関が有意であった(r=-.287, p<.05)。このことは、関係性葛藤場面で関係性攻撃をすることで、仲間に入れてもらえたり、返事をしてもらえたりと自らの望む補償が得られると考える幼児ほど、関係性攻撃の評定が高いことを示していた。この結果が、児童を対象とした坂井・山崎(2004)と一致する結果であり、幼児における関係性攻撃も SIP の偏りと関連があり、特に関係性攻撃をすると自分の望む目標が達成できる、つまり関係性攻撃が有効であると考える幼児は関係性攻撃をする傾向にあると考えられる。

Ⅱ-1.児童対象調査の使用尺度の検討(表 2-10)

使用した尺度の内的一貫性の確認をするため、クロンバックの α 係数を算出した。

児童評定の養育行動尺度 心理的コントロール 6 項目について検討した結果, 1 項目を除外し, 5 項目を心理的コントロール因子とした。また TK 式親子関係検査, FDT 親子関係診断検査については, 十分な内的一貫性が確認されたことから, 各下位尺度をそのまま用いることとした。

教師評定の CSBS-T 十分な内的一貫性が確認されたことから, Kawabata et al.(*in press*)と同様の 4下位尺度を用いることとした。

Ⅱ-2. 児童対象調査の養育行動, SIP, 攻撃行動の関連の検討

まず各変数の記述統計量を算出し(表 2-10), 次に養育行動, SIP, 児童の行動の相関係数を算出した(表 2-11, 2-12)。なお, 本報告では欠損データを除外し,養育行動-児童の行動 41 名,養育行動-SIP74 名,SIP-児童の行動 121 名について行った分析結果を報告する。

養育行動—攻撃行動の関連(表 2-11) 関係性攻撃については[厳しいしつけ]と正の相関が有意, [非難]と正の相関が有意傾向となった(r=.354, p<.05; r=.275, p<.10)。これは厳しいしつけや非難を受けていると子どもほど、関係性攻撃をしがちであることを示している。[非難]は攻撃行動との関連が想定されており(品川ら, 1972)、その想定と一致するとともに, [非難]が関連する攻撃行動には関係性攻撃も含まれていることが示唆された。また幼児の結果と同様に, 心理的コントロールとの関連は

表 2-10 各変数の記述統計量

		N	平均	(SD)	a係数
養育行動							
厳しいし	つけ	86	3.8	(0.82)	.70
被拒絶感		86	1.8	(0.69)	.83
被受容感		86	4.2	(0.68) "	.86
非難		86	2.9	(0.58)	.78
心理的コ	ントロール	83	2.3	(0.84)	.83
生会的情報処	<u>.</u> 理						
莒	敵意帰属(RC敵意帰属)	168	1.6	(1.43)	
葛藤状	関係性攻撃行動の不適切度の評価(RCRA不適切度評価)	166	5.5	(0.82)	
	関係性攻撃行動に対するネガティブ感情予期(RCRAネガ感情予期)	167	4.0	(2.06)	
況任	関係性攻撃行動に対する道具的目標達成予期(RCRA不補償予期)	166	7.5	(1.92	.82) .69) .68) .58) .84) .82) .06) .92) .15) .76) .74) .09) .10) .88)	
葛』身	敵意帰属(OC敵意帰属)	170	0.6	(1.15)	
蒸物 /*	関係性攻撃行動の不適切度の評価(OCRA不適切度評価)	167	5.6	(0.76)	
	関係性攻撃行動に対するネガティブ感情予期(OCRAネガ感情予期)	167	3.4	(1.74)	
況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	関係性攻撃行動に対する道具的目標達成予期(OCRA不補償予期)	86 3.8 (0.82) 86 1.8 (0.69) 86 4.2 (0.68) 86 2.9 (0.58) 83 2.3 (0.84) 168 1.6 (1.43) 166 5.5 (0.82) 167 4.0 (2.06) 166 7.5 (1.92) 170 0.6 (1.15) 167 5.6 (0.76))				
子どもの行動	(教師評定)						
関係性攻		135	2.5	(1.10) •	.92
身体的攻	擊(PA)	135	1.7	(1.05) •	.91
リーダー	シップ(L)	135	1.9	(0.88) 7	.88
仲間集団	への誘い(RI)	135	3.0	(0.89) •	.87

※SIPの値には、エピソードごとに設けられた敵意帰属に関する2項目、反応決定に関する1項目の得点を合計した値を用いた。

表 2-11 養育行動と児童の行動との相関係数

	厳しい しつけ	被拒絶感	被受容感	非難	PC
関係性攻撃	.354 *	.193	037	.275 †	.201
身体的行動	.190	.262 †	245	.191	.198
リーダーシップ	.068	273 †	.222	157	191
仲間集団への誘い	264 †	314 *	.205	307 †	406 **

表 2-12 SIP の各変数と養育行動, 児童の行動との間の相関係数

	厳しい しつけ	被拒絶感	被受容感	PC	非難	RA	PA	L	RI
RC敵意帰属	.176	.075	141	047	.057	.051	.051	.241 **	.156
RCRA不適切度評価	.009	.000	.090	.099	.037	009	.028	094	.059
RCRAネガ感情予期	029	031	.002	014	.105	006	.054	.144	037
RCRA不補償予期	063	020	043	.100	.060	.047	.001	.102	.010
OC敵意帰属	016	.034	.058	.064	.087	.192 *	.285 **	.102	008
OCRA不適切度評価	.179	063	.133	051	056	090	085	040	.188 *
OCRAネガ感情予期	040	.091	.009	.027	.018	.130	.219 *	.026	151
OCRA不補償予期	.061	.027	093	023	017	034	057	.049	.115

認められなかった。本研究においては、心理的コントロールの使用が関係性攻撃の使用と関連するのではなく、心理的コントロールの不使用が向社会的な行動の使用と関連することが示唆された。

養育行動-SIPの関連(表 2-12) 養育行動と SIPの間には有意な相関は認められなかった。

SIP-攻撃行動の関連(表 2-12) 関係性攻撃については、[OC 敵意帰属]と正の相関が認められた(r=.192, p<.05)。これは身体的・物理的葛藤状況において "相手が故意に自分に危害を加えた" と考える傾向にあるほど、関係性攻撃をしがちであることを示していた。これは状況こそ異なっているが、先行研究(Crick、1995; Crick、et al.,2002)と一致する結果である。このことから、関係性攻撃は児童においても SIP の偏りと関連していることが確認された。一方で、STEP5 との関連は認められず、これは坂井・山崎(2004)とはことなる結果であった。幼児においては不補償予期と関係性攻撃が関連していたにも関わらず、児童において関連しなかったことは、結果予期の目標達成をより具体的に補償予期とした点が関連しているとも考えられる。つまり本研究では"自分の思う通りになる"状態をより具体的に"仲間にいれてくれる(RC1)"、"なおしてくれる(OC1)"行動としたが、幼児においてはこの行動が"自分の思う通りになる"状態であり、児童においては"自分の思う通りになる"状態ではない可能性があるということだ。この点については今後の検討が必要となる。

Ⅲ. 幼児・児童の相関分析の比較

以上の相関分析の結果をもとにして関係性攻撃に注目し、養育行動、SIP、関係性攻撃の関係をモデル化した(図 1, 2)。図より、幼児においては一部ではあるが養育行動-SIP、SIP-関係性攻撃に有意な関連が認められた。一方で、児童においては養育行動-SIP には関連は見られず、SIP-関係性攻撃において関連が見られたのみであった。このことから、特に幼児期においては関係性攻撃の形成についても SIP の媒介モデルによる議論可能性があることが示唆された。

また養育行動と SIP の関連が幼児では見られたにも関わらず、児童では見られなかったことについては、複数の可能性が考えられる。その中の1つの可能性として、幼児期と比較して児童期における子どもの認知や行動に対する養育行動の影響が小さくなっている可能性が挙げられる。児童期は親との接触時間が減少する一方で(総務省、1995)、友人との関係が広がる時期である。また対人関係において友人優勢型が母親優勢型を上回ることも報告されている(井上・高橋、2000)。攻撃行動の形成が社会的学習理論により説明されると考えれば、観察学習のモデルとして親や友人が挙げられているが(Bandura、1973)、主なモデルが、より接触時間が長く、より重要な他者である友人となったことも考えられる。このことから親の養育行動の影響が相対的に小さくなり、関連が見られなくなったと考えられる。

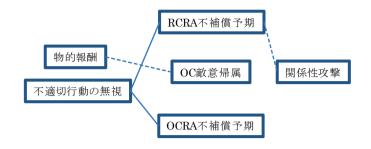


図1 幼児の相関分析に基づく、養育行動、SIP、関係性攻撃の関連

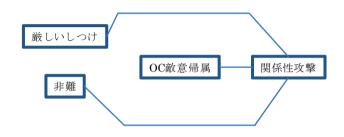


図 2 児童の相関分析に基づく,養育行動,SIP,関係性攻撃の関連

今後の展開

本研究では、攻撃行動(特に関係性攻撃に注目して)の形成過程を明らかとするために、幼児、児童を対象として、養育行動、SIP、関係性攻撃の関連を検討した。その結果から、特に幼児において関係性攻撃の形成過程を考える上でも媒介モデルの適用可能性が示唆された。また先行研究のように養育行動が極端に虐待的なものでなくとも、このモデルによる攻撃行動形成メカニズムについての議論が可能であることも示唆された。今後は各発達段階においてさらにこの媒介モデルの検討を行うとともに、因果関係を明らかとするために、後縦断研究などを行っていくことが必要となる。この媒介モデルの検討を行い、過度な攻撃行動の形成メカニズムを明らかにすることで、過度な形成を未然にふせぐ介入の方策に対する有効な知見が得られると考える。

引用文献

- 東・柏木・繁多・唐澤 2002 FDT 親子関係診断検査手引き 日本文化科学社
- Bandura 1973 Aggression: A social learning analysis. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Barber 1996 Parental psychological control: revisiting a neglected construct. *Child development*, **67**, 3296-3319.
- Crick 1995 Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, **7**, 313-322.
- Crick 1996 The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*. **67**, 2317-2327.
- Crick, Casas, & Mosher 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Development Psychology*, **33**, 579-588.
- Crick & Dodge 1996 Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. Child Development, 67, 993-1002.
- Crick & Grotpeter 1995 Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. Child Development, 66, 710-722.
- Crick, Grotpeter, & Bigbee 2002 Relationally and physically aggressive children's intent attributions and feelings of distress for relational and instrumental peer provocations. *Child Development*, 73, 1134-1142.
- Crick, Ostrov, & Werner 2006 A longitudinal study of relational aggression, physical aggression, and children's social psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **34**, 131-142.
- Crick & Werner 1998 Response decision processes in relational and overt aggression. *Child Development*, **69**, 1630-1639.
- Dodge, Pettit, & Bates 1995 Social information-processing patterns partially mediate the effect of early physical abuse on later conduct problems. *Journal of Abnormal Psychology*, **104**, 632-643.
- Dodge, Pettit, McClaskey, Brown, & Melissa 1986 Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **51**, 1-85.
- 濱口佳和 2002 攻撃性と情報処理 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学-発達・教育編-ナカニシヤ出版
- Hart, Nelson, Robinson, Olsen, & McNeilly-Chouque 1998 Overt and Relational Aggression in Russian Nursery School Age Children: Parenting Style and Marital Linkage. *Developmental Psychology*, 34, 687-697.
- 畠山美穂 2003 幼児の仲間受容と SIP 能力の関係 幼年教育研究年報, 25, 35-40.
- 畠山美穂・山崎 晃 2003 幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究:参与観察を通して得られたいじめの実態 発達心理学研究, 14,284-293

- 井上まり子・高橋惠子 2000 小学生の対人関係の類型と適応-絵画愛情関係テスト(PART)による 検討- 教育心理学研究, 48, 75-84.
- 磯部 美良 2002 幼児の関係性攻撃と社会的スキルに関する短期縦断的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域、**51**、249-255.
- 磯部美良 2006 幼児期の関係性攻撃と親の養育スキルの関連 日本教育心理学会第48回総会発表論 文集 p.5
- 磯部美良・佐藤正二 2003 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法 創造性開発のために 中公新書
- Kawabata, Crick, & Hamaguchi, in press Relational victimization and culture: Links to social information processing patterns and social psychological adjustment, *Intermation Journal of Behavior Development*.
- 桑原千明 2009 攻撃行動と養育行動との関係の検討-SIP を媒介として-(中間報告), 発達研究, 23, 229-239.
- Nelson, Hart, Yang, Olsen, & Jin. 2006 Aversive Parenting in China: Associations With Child Physical and Relational Aggression. Child Development. 77, 554-572.
- 坂井明子・山崎勝之 2004 小学生の 3 タイプの攻撃性が反応の評価および結果予期に及ぼす影響教育心理学研究, **52**, 298-309.
- 三鈷泰代 2008 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究-養育スキルと子どもの行動傾向との関連-
- 発達研究, 22, 181-190.
- 品川不二郎・品川孝子・森上史郎・河井芳文 1972 TK 式診断的親子関係検査 田研出版 総務省青少年対策本部 1995 子どもと家族に関する国際比較調査

謝辞

本研究を実施するにあたりご指導・ご助言を賜りました,筑波大学人間総合科学研究科濱口佳和教授に心より感謝いたします。また調査の実施にご協力いただきました幼稚園・保育所の先生方,幼児のみなさん,その保護者様,小学校の先生方,児童のみなさんに心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。